

大学時報

University Current Review

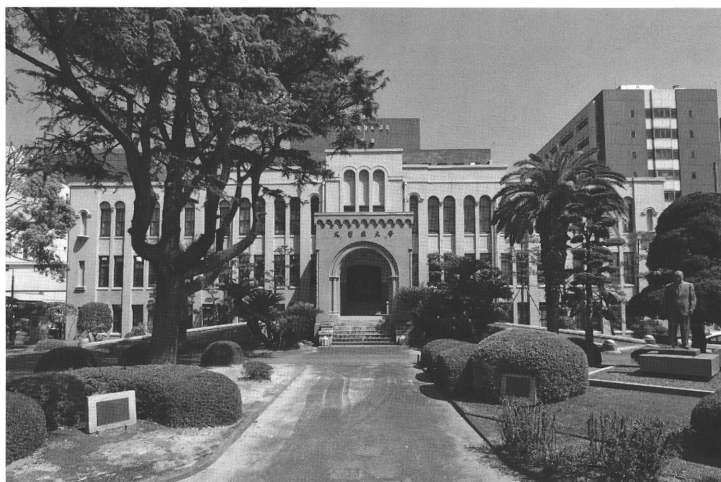
特集 私立大学における教員養成教育のあり方



No. 360 Jan. 2015

日本私立大学連盟

<http://www.shidaiaren.or.jp/activities/daigakujihou>



大学本館

だいがくのたから……久留米大学

大学本館

久

留米大学は、一九二八（昭和三）年四月二八日に九州医学専門学校として開校した。当時、日本足袋株式会社の社長だった石橋徳次郎氏と弟で専務取締役の正一郎氏（株式会社ブリヂストンの創業者）から土地一万坪と校舎の寄付を受け、翌年の九月に鉄筋コンクリート三階建ての「学校本館」が竣工した。現在は、「大学本館」として使用している。

大学本館は、戦前、戦中、戦後の激動と幾多の苦難の時を乗り越えて、多くの医学生達の学び舎として、その使命を果たしてきた。大学本館は、戦前、戦後に二度の水害に見舞われ、特に一九五三（昭和二十八）年六月の筑後川大水害は、本学が存亡の危機に陥る未曾有の大洪水であったが、学内外から生じた復興の意欲と支援によって、その後の大学発展の礎を築いた。大学本館の二階にある学長室前の壁には、水位が建物二階の床上一・三メートルの位置にまで達した水害時の記録が、最高水位のプレートと当時の写真とともに掲示されている。

久

留米大学は現在、八十有余年の歴史を刻み、五学部一学科、五つの大学院研究科を擁する私立総合大学に発展・拡大し、幅広い分野で活躍する多くの人材を輩出している。大学本館は今も、大学の移りゆく歴史を竣工当時と変わらぬ姿で静かに見守っている。

大学時報 目次

No. 360 Jan. 2015

巻頭言

グローバルに活躍する女性を育む／坂東眞理子

年頭所感

大きな変化とグローバル化の時代に
ますます大切になる私立大学の役割

清家 篤

10

大学のあるべき姿

姜 尚中

12

座談会

学長の初夢

日比谷潤子／坂田 隆／濱田純一／(司会)村田晃嗣

私立大学フォーラム——平成二十六年度前期総括

広報・情報部門会議(フォーラム)

74

特集

私立大学における教員養成教育のあり方

現代の教員養成改革と私立大学における教員養成

森田真樹

32

時代が求める教員養成を探索しつつ

太郎良 信

38

——文教大学教育学部の現状と方向

「質の高い教員養成」に向けて

——教職課程の全学体制による取り組み

森山賢一

44

時代をリードする女性教員の養成

——創設者の理念を基盤とする日本女子大学の教員養成のあり方

吉崎静夫
関口ひろみ

50

教職支援センターによる学生支援

伊藤豊美

54

人間主義の教員養成を目指して

鈴木将史

60



〈表紙〉

制作者名:大槻孝之(日本大学芸術学部教授)

作品名:一片の波(東京都立川市庁舎)

制作年:2010年

寸法:高さ530cm 幅360cm 奥行490cm

材料:コルテン鋼

写真:山本 糾

明日への試み

武蔵野大学経済学部

原点回帰・新手法・そして人間力

——レイト・カマー学部存在意義

齋藤英里

88

小特集 保護者・保証人と大学の関係性とは

保護者との関係づくりの意義と課題

ペアレンツデー・地域交流フォーラム

父母の会の活動について

吉武博通

68

古谷修一

70

鹿島久幸

72

すいそつ

日本の高等教育と医学研究開発

小川秀興

66

私の授業実践——教育現場の最前線から

基礎あつてこそその応用

藤本頼生

86

わが大学史の一場面——日本の近代化と大学の歴史

信念を貫き、自ら学び、実践する

真橋美智子

92

加盟校の幸福度ランキングアップ(大学発オリジナル酒編)

地元の産学連携による街おこしサワワーの開発

——立正大学吉田ゼミ発「E杏サワワー」と「ボンチサワワー」・立正大学

清水幸代

98

清酒・勝馬米・立命館大学

久保 幹

100

クローズアップ・インタビュー

アルピニスト 野口 健氏に聞く

(聞き手) 山岡三子

102

新会員代表者紹介

中央大学／京都産業大学

110

新学長紹介

東海大学

111

大学点描

昭和女子大学

THESAURUS UNIVERSITATIS だいがくのたから

久留米大学

連盟ニュース

111・112 編集後記

112

(カット) 熊谷有子

坂東眞理子 昭和女子大学理事長・学長。東京大学文学部卒。総理府に入省後、内閣広報室参事官、総理府男女共同参画室長等を歴任し、'03昭和女子大学理事。'07より学長。

清家 篤 慶應義塾長・本連盟会長。'83慶應義塾大学大学院商学研究科博士課程修了。博士(商学)。労働経済学専攻。主著『高齢化社会の労働市場』他。

美 尚中 聖学院大学学長。早稲田大学大学院政治学研究科博士課程修了。国際基督教大学准教授。東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授等を経て、現職。主著『悩む力』他。

日比谷 潤子 国際基督教大学学長。ペンシルヴァニア大学大学院言語学科博士課程修了。慶應義塾大学助教授等を経て、国際基督教大学教授。'12より現職。

坂田 隆 石巻専修大学学長。東北大学大学院農学研究科博士後期課程修了。石巻専修大学助教授、教授、理工学部長を経て、'07より現職。専門は大腸生理学、ラクタ、災害対応。

濱田 純一 東京大学総長。東京大学大学院法学政治学研究科公法専門課程博士課程単位取得退学。博士(法学)。情報法、情報政策専攻。'09より現職。主著『情報法』他。

村田 晃嗣 同志社大学学長。神戸大学大学院法学研究科博士課程修了。博士(政治学)。広島大学助教授、同志社大学教授、評議員、法学部長・研究科長等を経て、'13より現職。

森田 真樹 立命館大学産業社会学部教授。'00広島大学大学院国際協力研究科博士課程修了。博士(教育学)。同学部准教授等を経て、'14より現職。

太郎 良信 文教大学教育学部教授、教育学部長。'87筑波大学大学院教育学研究科博士課程満期退学。同学部助教授を経て、'13より現職。主著『生活綴方教育史の研究』他。

森山 賢一 玉川大学教師教育リサーチセンター長、教職大学院教授・教育学部教授。'98常磐大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士(人間科学)。主著『教育課程編成論』他。

吉崎 静夫 日本女子大学教職教育開発センター所長、人間社会学部教授。'78九州大学博士課程満期退学。'86学術博士。主著『デザインとしての教師、アクターとしての教師』他。

関口 ひろみ 日本女子大学教職教育開発センター所員。千葉大学大学院教育学研究科修士課程修了。

伊藤 豊美 ノートルダム清心女子大学文学部英語英文学科教授。'79岡山大学教育学部卒。岡山県公立高等学校教頭を経て、'12より現職。主著『実践・英語科指導法演習』他。

鈴木 将史 創価大学教育学部長、教授。'89東京大学大学院理学系研究科数学専攻単位取得愛知教育大学助教授を経て、'12より現職。共著『小学校算数科の指導』他。

小川 秀興 学校法人順天堂理事長、同大学名誉教授。'13国際皮膚科学会連合最高優功賞受賞。(公財)医学教育振興財団理事長、医学系大学倫理委員会連絡会議理事長等を務める。

吉武 博通 筑波大学大学研究センター長、ビジネスサイエンス系教授。'77新日本製鐵(株)入社、'03筑波大学教授。'06同大学理事・副学長。'09より現職。経営組織論専攻。

古谷 修一 早稲田大学教務部長、法文学術院教授。'87早稲田大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学。国際法専攻。

鹿島 久幸 松山大学総務部次長。'86松山商科大学(現・松山大学)経営学部卒。

藤本 頼生 國學院大学神道文化学部准教授。國學院大学大学院文学研究科神道学専攻博士後期課程修了。博士(神道学)。近代宗教行政史専攻。

齋藤 英里 武蔵野大学経済学部長。慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程単位取得後退学。'05武蔵野大学現代社会学部現代社会学科教授、'08政治経済学科長を経て、現職。

真橋 美智子 日本女子大学副学長・人間社会学部教授。日本女子大学文学部卒。'95同大学人間社会学部教育学科助教授。'03同教授。主著『子育て』の教育論』他。

清水 幸代 立正大学総務部研究支援課長。明治学院大学法学部卒。

久保 幹 立命館大学生命科学部教授。広島大学大学院工学研究科工業化学博士課程前期課程。工学博士(大阪大学)。イリノイ州立大学医学部、文部省在外研究員等を経て、現職。

野口 健 アルビニスト。亜細亜大学国際関係学部卒。'99エベレスト登頂、七大陸最高峰世界最年少登頂記録(当時)を樹立。主著『世界遺産にされて富士山は泣いている』他。

山岡 三子 フリーアナウンサー。学習院大学卒。立教大学大学院二世紀社会デザイン研究科博士後期課程修了。博士(社会デザイン学)。名古屋短期大学客員教授。



東京・世田谷キャンパス

大学点描

世田谷とボストンにキャンパスがある
世田谷とボストンでプロジェクト活動に取り組む

昭和女子大学

海外校・昭和ボストンでは全学生が専門を生かしたフィールドワークができるプログラムを用意しています。
また、欧米やアジアの国々の海外協定校との交換留学も盛んで世田谷キャンパスも国際色豊かになりました。



米国・ボストンキャンパス

人材を育成します。



箱根やBMWとコラボしたプロジェクト活動

「女子学生のための優良企業ランキング」調査結果を報道発表



フジテレビジョンと共同通信社の食堂で「昭和女子大ランチ」



ファッションショーや巨大オブジェをプロデュース

地域や企業と協定を締結

世田谷区と包括協定を、昭和信用金庫・城南信用金庫と産学連携協定を締結。学生が専門知識を生かして地域の子育て支援や福祉、商店街活性化などの課題に取り組んでいます。

昭和女子大学キャリアカレッジ

新しくビジネスに挑む起業家の養成から、管理職・リーダーとしてのキャリアアップまでの講座を開設。生涯にわたる女性を応援する昭和女子大学のビジネススクールです。

世界とつながる、社会とつながる、企業とつながる女性



ボストンでは現地学生とプロジェクト活動にも取り組みます。



メンターが学生にアドバイス。



ケータイ社会研究レポートコンテスト（モバイル社会研究所・NTT ドコモ）で最優秀賞

昭和女子大学4つの特長

細やかなキャリア形成支援制度により就職率は4年連続で女子大学ナンバー1となりました。

*サンデー毎日「全国240大学実就職率ランキング」（7月27日号）2014年3月卒業生1,000人以上の女子大学中

社会人メンターネットワーク

学生のロールモデルとなるメンター。300人以上の社会人女性が登録するネットワーク。多様なキャリアをベースに将来の働き方や社会との関わり方を親身にサポートします。

現代ビジネス研究所

幅広い業界で活躍する現役ビジネスマンが研究員として登録。学生・教員・研究員がプロジェクトチームを組んで企業から出される課題の解決や新商品の開発にチャレンジします。

昭和女子大学の使命はグローバル社会で役割を担い、自立し、行動できる女性人材の育成です。

一九二〇年に創立した私塾・日本女子高等学院を前身とし、戦災等の苦難を乗り越え四五五年に現在の世田谷区太子堂に移転しました。一九四六年に日本女子専門学校となり、四九年には新学制による昭和女子大学が誕生し、翌五〇年に短期大学部を設置しました。一九七四年に大学院修士課程、八九年に博士課程を開設して一貫教育体系を完成させ、同年オープンカレッジの開

校で生涯学習機会を提供しています。

一九八五年には米国マサチューセッツ州ボストンに海外分校・昭和ボストンを開校し、全学生を対象に海外留学・研修プログラムを実施しています。

教育ニーズの変化に対応して積極的に改組転換を行い、二〇一四年に短期大学部を廃止。現在は、人間文化学部、人間社会学部、生活科学部、グローバルビジネス学部を設置しています。

社会貢献活動も活発で、二〇〇五年に特定非営利活動法人NPO昭和を設立し、世田谷区と協定を締結して多機

能型子育て支援拠点施設・子育てステーション

世田谷や男女共同参画センター・らぷらすを受託運営しました。地域活動が盛んとなり、二〇一四年には地域の窓口となる地域連携センターを開設。また、二〇一三年に設置した現代ビジネス研究所は企業から与えられたテーマについて学生・教員・社会人研究員がチームでプロジェクト活動するブラットフォームになっています。

社会人女性が生徒の相談相手となるメンター制度も用意。世界、企業、社会とつながる教育を実践しています。

昭和女子大学

- 昭和ボストン（海外キャンパス）
- 大学院／文学研究科・生活機構研究科
- 人間文化学部／日本語日文学科・歴史文化学科・英語コミュニケーション学科・国際学科
- グローバルビジネス学部／ビジネスデザイン学科
- 人間社会学部／心理学科・福祉社会学科・現代教養学科・初等教育学科
- 生活科学部／環境デザイン学科・健康デザイン学科・管理栄養学科

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂 1-7-57 / 東急田園都市線「三軒茶屋」駅下車、徒歩7分

Facebook



大学時報

2015・1

第360号



グローバルに活躍する 女性を育む

坂東 眞理子 ● 昭和女子大学理事長・学長

昭和女子大学は九四年の歴史をもつ大学で、一貫して「世の光となる」女性の育成に努めてきました。

現在は、日本の経済社会の活性化のためには女性の活躍が不可欠と認識されるようになり、機会は飛躍的に増大しています。時代が必要とされる力をつけるため、昭和女子大学はポストンキャンパスでの学び、社会人メンターや現代ビジネス研究所などの協力を得て、世界とつながり、社会とつながり、企業とつながり、多様なプログラムを実践してグローバルに活躍する女性を育てています。

● 年頭所感

大きな変化とグローバル化の時代に ますます大切になる私立大学の役割



清家 篤 ● 本連盟会長・慶應義塾長

二〇一五年の年頭にあたり、日本私立大学連盟加盟大学のますますのご発展と、ご関係の皆様のご健勝、ご多幸をお祈り申しあげます。

今日の日本は大きな変化の時代を迎えております。例えば社会の最も基本的な要素である人口は、二〇一一年の約一億二八〇〇万人をピークに減少に転じ、現在の大学生が社会の各分野でトップに立つであろう二〇四〇年代後半には一億人の大台を割り、彼ら自身が高齢者となる二〇六〇年代には八〇〇〇万人台半ばと、現在の三分の二ほどになると推計されています。

そのような大きな変化の時代には、過去の延長線上でものを考えたり問題を解決することは難しくなります。つねに新しくなる状況を自ら理解し、その理解に基づいて問題を解決できる能力が求められます。つまり、自分の頭でしっかりとものを考えることができる力がますます求められると言えるでしょう。

そしてまた今日は、大きなグローバル化の時代でもあります。経済や社会の国際的な相互依存性はますます高まり、国境を越えた人の動きも急ピッチで増えています。そのようなグローバル化する時代には、異なる言語を話し、異なる文化的背景をもった人たちと一緒に仕事をし、生活することが珍しいことではなくなってきました。

このことは、海外で仕事をしたりする一部の人だけの話ではなく、例えば日本を訪れる外国人観光客は昨年一三〇〇万人を超えており、日本のどんな地方でも外国人と接触し、ビジネス

をする機会がありうる時代になっていると言えます。そうした時代には、外国語の運用能力や、異文化への適応能力などがますます求められるようになります。

そうした中で大学の果たすべき役割は極めて大きいものとなります。変化の時代に求められる自分の頭で考える力とは、やみくもに思いを巡らすということではありません。系統的、システマティックにものを考えるということ、つまり問題を見つけ、その問題がなぜ起きているのかを説明する論理を組み立て、その論理が正しいかどうかを何らかの方法で確かめ、正しければそれに基づいて問題を解決する、というプロセスです。これは、未解決の研究テーマを見つけ、オリジナルな仮説を構築し、その仮説を科学的に検証して結論を導くという、学問の作法に他ならず、これを身につける最良の場は大学に他なりません。

異なる言語や異文化を理解する力を高める場としても、大学が最良の場所であることはいつの時代にも同じです。語学や海外文化を学ぶことができるということはもちろんのこと、留学してくる外国人学生と交流し、また自らが海外の大学に留学することなどで国際経験を積むこともできます。

そしてそうした大学の中でも、私立大学の果たすべき役割がとりわけ大きいことは言うまでもありません。これは大学生の約八割が私立大学に学んでいるという量的な重要性だけでなく、変化とグローバル化の時代にふさわしい多様性をもっているという、質的な意味においても私立大学の役割は重要であります。日本の高等教育が画一的なものであれば、変化の時代に柔軟に対応することはできないでしょう。

私立大学は、それぞれが独自の建学理念をもち、その理念に従って、個性ある、多様な教育を行っています。変化の時代には高等教育の多様性がますます必要となりますから、私立大学はその多様性を確保するために不可欠の存在です。留学生を多く受け入れ、学生の多くに海外体験をさせるといったことも、柔軟なカリキュラムをもち、フットワークの良い私立大学で先進的に行われています。今日の変化とグローバル化の時代に、柔軟で多様性に富む私立大学の果たすべき役割は、ますます大きなものとなると確信しています。

大学のあるべき姿

姜 尚中 ● 聖学院大学学長

— 大学の「改革旋風」 —

少子高齢化と低成長、グローバル化の進展とともに、大学を取り巻く内外の環境は激変し、大学は淘汰と選別の時代を迎えつつある。「選ぶ大学」から「選ばれる大学」へ。大学は、受験生という消費者から選ばれなければ経営的に成り立たず、高等教育という市場から「退場」を余儀なくされかねなくなっているのだ。特に国からの一定の助成金があるとはいえ、大学の運営を主に学納金に頼らざるを得ない私立大学の場合、事態はより深刻だ。勢い、各大学とも入学者集めに血眼になり、あの手この手の意匠を凝らした方法で学生募集に狂奔せざるを得なくなっている。

他の大学にはないような豪華な食堂やラウンジ、パウダールームつきのトイレや最新の情報機器の導入、海外での語学研修などを組み入れたカリキュラ

ムやインターンシップを活用した就職率のアップ、入学前準備教育や基礎学力向上のためのプログラムを導入など、数え上げたら切りがない。さらに、経営体としての大学のスリム化に向けて、人件費のカットや多様な雇用形態の教職員のリクルート、意思決定プロセスのスピードアップなど、さまざまな改革が進められている。

こうして大学はいまや、市場経済で流通するカテゴリーや見方によって再編の波に洗われ、その傾向は、歴史の浅い私立大学のみならず、旧帝国大学・国公立大学をも巻き込んで、「改革旋風」とでも言うべき現象を呈しつつある。その風速は弱まるどころか、ますます強くなり、弱小の大学を突風のように襲いつつあるのだ。

ただ、ここで不思議に思えるのは、こうした旋風と化した「改革」が、いわゆる上位校や下位校を問わず、奇妙にもすべての大学を画一化へと押しやる



力として作用しているように見えることだ。どの大学を見ても、まるで金太郎アメのように「グローバル」の言葉が躍っていることなどはその最たるものである。

さらに大学間の競争は、こうした画一化の中で、上位と下位の大学の格差を広げつつある。世界の大学のランキングで上位一〇〇位以内に入れる大学や「グローバル化」を牽引する大学と、その他の、「グローバル」とは無縁の、「ローカル」として位置づけられる大学との二極化が進んでいるのである。はたしてこのような画一化の中の二極化は、大学の健全なあり方と言えるのであろうか。

二 漱石とウェーバーから学ぶもの

現在の日本の大学はまるで、アベノミクスによって潤うグローバルな大企業と、円安と原材料の高騰に呻吟する中小零細企業との二極化と同じように、「グローバル」の「G」のグループと「ローカル」の「L」のグループに選別されつつある。この二極化の選別の中で、先に述べたような画一化が進み、大学は効率性や生産性、財政均衡や競争力などの向上にしのぎを削らざるを得ないのである。

こうした現象が大学の教育現場から「真の教育」

の機会を奪いつつあることは、現場に身を置く教員たちが肌身で感じていることではないか。学生という消費者に、学納金に釣り合うサービスメニューをどれだけ用意し、実際に食してもらってどれだけの満足を与えられるのか、それが教育という目に見えない、付加価値を供給するサプライヤーとしての大学の役割であり、教員は「サービス労働者」と化しつつあると言っても過言ではない。こうした現象は、何もグローバル化とともに最近になって始まったわけではない。すでに明治の半ばから学校現場に顕著になりつつあったことは、文豪夏目漱石の慨嘆を見れば明らかである。

末端の教育行政に関わる「抱閥撃柝の輩」でもあった漱石は、教育現場の有り様を次のように痛烈に批判している。

「今の書生は学校を旅屋の如く思ふ、金を出して暫らく逗留するに過ぎず、厭になればすぐに宿を移す、かかる生徒に対する校長は、宿屋の主人の如く、教師は番頭丁稚なり、主人たる校長すら、時には御客の機嫌を取らねばならず、況んや番頭丁稚をや、薫陶所か解雇されざるを以て幸福と思ふ位なり、生徒の増長し教員の下落するは当前の事なり」（『愚見数則』明治二十八年）。

漱石の「数則」は、かつての「尋常中学校」の現状を憂えた論説であるが、それはそのまま現在の大
学、特に学生集めに汲々とせざるを得ない私立大学
の現状にも当てはまるのではないか。

確かに、一方で少子高齢化が進み、他方で大学進
学率が五〇%前後にまで跳ね上がった日本の高等教
育の現状を考えると、大学の現場で、「先生を敬ふ事、
父兄に過ぎたり、先生も亦弟子に対する事、真の子
の如し」といった、師弟関係による「薫陶」など、
旧制高校のエリート教育ならいざ知らず、時代錯誤
と言えるかもしれない。

しかし、具体的な教育の現場で最も重要なのは結
局、教える側と教わる側とのパーソナルな関係であ
り、そのことは、アクティブ・ラーニングなどの双
方的なコミュニケーションによる教育方法にも当て
はまることではないか。そこには、単なる教育とい
うサービスの消費者と供給者の関係を越えた何かが
なければならぬのだ。その何かとは、職人の技能
伝授における親方と弟子との間の関係にたとえられ
るかもしれない。どれほどの膨大な、無限に近い情
報量にアクセスでき、情報機器を活用したさまざま
なネット上の情報交換が可能になっても、大学とい
う特定の場で行われる教育には、そうしたクラフト

マンシップの伝授に伴うパーソナルな関係が必要と
されるのだ。それがなければ、大学というリアルな
空間はもはや必要とされず、バーチャルな大学だけ
で用は足せることになってしまふ。

問題は、超情報化が進むグローバルな時代にあっ
ても、いやまさにそれだからこそ、大学でしかやれ
ないことは何なのか、そのことを真剣に考えてみる
ことではないか。

ドイツの社会学者マックス・ウェーバーは、第一
次世界大戦後の講演「職業としての学問」
(*Wissenschaft als Beruf*)の中で、今日の大学の
あり方を予見したかのように、大学が資本主義的経
営と化し、アメリカ型の知の官僚制化が不可逆的に
進行していくと洞察していた。逆に言えば、大学に
おけるクラフトマンシップ型の知的関係は廃れてい
かざるを得ないと診断していたのだ。

しかし、だからこそ、ウェーバーは、知の官僚制
化と専門的な細分化を避けられない傾向として受け
入れつつ、にもかかわらず、人間と社会の価値の分
化(真・善・美など)と相克に対して学知(学問)
がどんな役割を果たせるのか、この点を若き学生た
ちに説こうとしたのである。それは、今日の言葉で
言えば、さまざまな価値に関わる「リベラル・アー

ツ」の可能性として理解することが出来るかもしれない。ドイツの大学のアメリカ化と、それに伴う医学や自然科学系統の研究が「国家資本主義的」な事業になっていく中、ウェーバーはあえて専門性を強調しつつ、「リベラル・アーツ」に通じる価値の問題に言及したのではないだろうか。

三 「モラトリアム」の場としての大学

漱石やウェーバーの時代から一〇〇年以上がたち、もはや彼らの考えは古色蒼然とし、現実の急激な変化とは無縁の、遠い「昨日の世界」の出来事のように思えるかもしれない。しかし、わたしは彼らの考えを現代的によみがえらせることは可能だと思う。いや、あえて言えば、そこにこそ、これからの大学、特に「L」のイニシャルでひとくりにされかねない弱小大学の新たな可能性が宿っていると考えている。なぜなら、大学とは、社会や時代が変わっても、どのつまり、成人になる前の段階にある一定年齢の若者たちが、社会のフルメンバーになるために必要で、社会的にも認められた猶予期間を過ごす場にはかならないからである。要するに大学は、社会的に認められた「モラトリアム」の場にほかならないのであり、したがって一人の個人として、市民とし

て、またバブリックな存在として生きていくスキルと、それを支える「リベラル・アーツ」的な知の伝授を行う場と考えるからだ。

生産人口が逡減し、都市への人口集中と地方の過疎化が進む日本では、雇用形態や労働のあり方も大きく変わってこざるを得ない。その中で特に問題を含みながら進行していくと予想されるのは、非正規雇用の増大と転職が常態化した雇用形態の拡大である。それは、社会人になっていく若年層のライフサイクルを大きく変えていくことになるはずだ。

とすれば、大学は就職のための職業訓練の場や即戦力の人材養成所とは違った役割を果たさなければならぬのではないか。なぜなら、大学というモラトリアムの場だけが、目前の必要から距離を置いて、人間と社会に関わるさまざまな価値などについて、「リベラル・アーツ」的なクラフトマンシップ型の知の伝授を可能にしてくれるからである。それを通じて学生たちは、自分にふさわしい目的ややりがいのモチベーションを身につけ、自ら進んでイノベーションしていく「人間力」を涵養することができるとは違いない。

まだ学長に就任して一年もたたないが、わたしが目指しているのは、ここに述べたような大学の姿だ。